日本文学研究資料新集

徳田秋声と岩野泡鳴

主義の再検討

小川武敏　編

有精堂

ISBN4-640-32528-2

日本文学研究資料新集

16　徳田秋声と岩野泡鳴
自然主義の再検討

1992年8月5日　初版発行

編者　小川武敏

発行者　山崎　誠

発行所　有精堂出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町1－39
電話 03(3291)1521（代）
振替口座　東京 9-40684

printed in Japan　ISBN4-640-30965-1 C3393

『日本文学研究資料新集』（全三十巻）刊行に際して

日本文学の研究は、戦後四十余年を経て、隆盛に向かうかたわら、再検討と新しい方法への模索が様々に試みられております。情報化時代といわれる現在の状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。小社ではそうした要請に答えて、『日本文学研究資料叢書』（全百巻）を刊行して、学界ならびに各方面から多大の御好評をいただきました。

右叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効に提供することを目標としたものです。こうした趣旨を継承しつつ、小社は新たにテーマ中心の論集として『日本文学研究資料新集』を刊行いたします。本集では各巻ごとにテーマを掲げ、より深く研究対象を掘り下げて、今後の研究の進路を導く羅針盤ともなることを切に念願しております。

今や国文学界においても、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、情報の氾濫が真の学問的交流の支障をきたすかのごとくになっているようにさえ見えます。そうした錯綜の上に、尨大な著作・雑誌・紀要等が続々刊行され、それらのうちのいくつかは、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったような、種々の困難が重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした状況の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本集は効果的な役割を果たす決意で新たに刊行されるものです。

日本文学の研究者、特に未来に伸びようとする若い研究者に、本集の趣旨が理解され、支持されて、永続的な事業として継続刊行されていく力を与えて下さるように願ってやみません。

有精堂出版株式会社

目　次■徳田秋声と岩野泡鳴・自然主義の再検討

〈徳田秋声〉

徳田秋声初期作品に見られる
社会小説的傾向についての考察・・・十文字隆行・1
徳田秋声論・・・村瀬紀夫・13
――文壇雌伏期の明治三十年代――
徳田秋声明治三〇年代の小説・・・片岡懋・36
「新世帯」論・・・佐々木徹・55
――秋声のリアリズム――
「新世帯」論・・・中丸宣明・62
――一つの「家庭」形成の物語――
秋聲の表現・・・山口佳津子・72
――「あらくれ」をめぐって――
『黴』と『道草』・・・渡辺誠・81
――その時間感覚についてのノート――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『黴』の研究・・・木村東吉・91
——客観的認識の内部構造について——
徳田秋声「縮図」論・・・十文字隆行・104
——個性と無名性の往還——
「私」を超えるもの・・・岡庭昇・115
——徳田秋声の晩年——
秋聲ノートII・・・榎本隆司・126
——西洋文学の受容——
徳田秋聲の一側面・・・松本徹・136

〈岩野泡鳴〉

岩野泡鳴の詩想・・・鎌倉芳信・143
——詩から小説への転回——
明治四十年前後の岩野泡鳴・・・梅本宣之・154
——泡鳴的デカダンの帰趨——

岩野泡鳴・小説文体の確立・・・鎌倉芳信・164
泡鳴の「神道」受容・・・永吉雅夫・174
――その自然観と国家観――
泡鳴「一元描写論」への視座・・・高橋敏夫・189
盲いたる半獣・・・渡部直己・204
――岩野泡鳴論――
泡鳴再読・・・百川敬仁・230
――「個人主義的国家主義」と異界――
◇
解　説・・・小川武敏・245
参考文献・・・小川武敏・254
◇
執筆者一覧・・・265

徳田秋声初期作品に見られる社会小説的傾向についての考察

十文字隆行

徳田秋声を論ずるにあたって、先行論文で著名なものに、生田長江のいう「生れたる自然派[1]」や、広津和郎の「吸取紙のやうに吸収して行く感受性[2]」等の形容があるが、その一方で、周知のように、夏目漱石が「文壇このごろ[3]」と題する雑感の中で「フィロソフィーがない」と指摘しており、山本健吉はこれを「フィロソフィーとは、今の言葉で言へば、モラルと言つてもよい」と解釈した上で、漱石の評は「秋聲の文學に對する、最大公約數的な批判である[4]」としている。そして、これらの評価が表裏のような関係となりながら、秋声の文学の特色を明らかにしつつあったと考えられる。

しかし、それらの評は、いずれも「新世帶[5]」、「足跡[6]」、「黴[7]」等を書いて後の、文壇的にも評価が定まった、いわゆる自然主義の作家としての秋声の位置付けとなっている。

そこで本稿では、「新世帶」、或いは『秋聲集[8]』以前の、習作期における諸作品、特により具体的なかたちで思想的なものを提出していると考えられる社会小説的傾向を持つものを中心に論じ、漱石評に対する一つの反証を試みたい。

まず注目されるのは、「斷片」（明治二八年九から一一月『青年文』）である。これは、六月の投書「評論ともつかず感想ともつかず、ちよつとした文章[9]」が田岡嶺雲に認められた結果の産物である。

構成は、姉の助けにより、遺産を他人に横領されながらもどうにか成長し、現在、家庭教師などをして帝大に学んでいる不幸な友人、早川俊吉からの書翰を集めたものとして、前書、結びを別にして二十四の章立てになっている。

その中で、本稿の主題である社会性に注目してみた場合、後の創作活動に関連して大きな意味を持ってくると考えられるのは次の箇所である。

政治界には口論のみ喧しくて、進軍鼓噪の聲なきにあらずや、劍戟の光なきにあらずや、人間の自由は言論の自由のみにあらざるなり。政治界すでに然り、學者社會も亦然り、腐

敗せる社會に大文學を求むるの難きより難し。

（略）偏頗なる愛情を喜び、慘酷なる杓子定規をもて文學を作らんとせば、勢ひ小ならざるを得ざるなり、人もし最も玲瓏なる才を抱いて、人心の隱微を悟り、社會の皮相を發き、罪科に陷れるを憐れみ、感覺なき奢侈に耽けるものを洞察し、而後廣大無邊の慈悲心油然として滿身に流るゝ時、社會の實相を直寫して能く公平なるを得ば自ら大文學たらん。

（第十四）

これは、国情を基礎に下層社会の人々を問題にし続けた嶺雲の主張にそうものであり、又、広津柳浪に代表されるような深刻小説とも通じるものである。

しかし、ここで述べられた内容に注意しながら初期作品を眺めてみるに、早い頃では童話や少年少女物、或いは翻案などが多く、必ずしもねらい通りの社会批判がなされているとはいえない。特に、紅葉門下であるという事情から、署名欄にしばしば「紅葉補」とあったりするので、師の手前、独創的な活動にも制約があったのではないかと推測される。

それらの中にあって見出せる一つの特徴として、勿論、下層社会も重要な要素をもっているには違いないにしても、それ以上に目につくのは、「社會の皮相を發」こうとする意図をもってか、より端的に問題提起しやすい政治家、華族、或いは新平民等を作中に多用していることである。とはいえ、それらが全て主題として扱われているわけではないが、秋声にとって関心を抱くに足る対象であったことは否定できまい。

例証として、最初に「藪かうじ」（明治二九年八月『文藝倶樂部』）を見る。これは、秋声自身が処女作と認めており、[10]題材に新平民を選んでいる。

新平民の医師赤木黙齋は、妻を亡くし、家内を世話してもらうために槇という女性を雇う。黙齋にはお礼という娘がいたが、彼女は父の書生横井鎮雄を慕う。しかし横井は同輩に羨まれ意地悪くされるために家を出てしまう。やがてお礼は婿を迎え、その一年余りの後、黙齋は死んでしまう。槇はその婿と通じる。お礼は行方知れずとなり、三年後に横井が立身出世して赤木の家を訪れた時には既に門札が替っていた。

この作品について、吉田精一氏は「新平民の生活を材料とし、善良な娘の発狂に終わる不幸な結末は、期してか期せずしてか悲惨小説に属する」[11]と述べ、そのような見方を受けてか、岩田光子氏も「全体に暴露的色彩が強い」[12]と評するに至る。

この一方で、社会問題以上に、登場人物の性格設定を重視する見方がある。

しかし、秋聲の意図は、さうではなかつた。書きたかつたのは、内気で傷つきやすく、自分の殻に閉籠りがちな、しかし、誇り高く強情な一面も持つ性格の人間と、その性格の人間がまづ間違ひなく辿るであらう運命、であつたと思ふ。いま、その性格をつつましやかで美しい十六歳の少女に与へたのだ。

（「徳田秋聲の初期作品」『姫路工業大学研究報告No.29』昭和五四年一二月）

筆者は松本徹氏であり、「藪かうじ」の主題は結局「内気で傷つきやすく、自分の殻に好んで閉籠つてしまふ性格ゆゑの悲劇」としている。そして氏はこのような見方を基本にし、作品に投影された秋声の性格を分析しながら、あわせて、題材の狭さ、外国文学とのかかわり等についての研究を報告している。

ところで、当時の評価に次のようなものがある。

瑣細の難なく、極めて自然に出来たる作なり、殊に天下の文人に先つて、穢多のために筆を執り、社會の同情を茲に誘導したる作家の義擧に對しては、吾人の深く謝せざるを得ざる所、知らず徳田秋聲とは何人か。

（八面樓主人「徳田秋聲の『藪かうじ』」明治二九年九月『國民之友』）

これは明らかに社会問題を取り扱ったことに対する讃辞であり、松本氏の論文では消極的なのであるが、日清戦争後の特色としてのいわゆる悲惨小説的傾向は認められるべきである。松本氏の見解は、秋声の文学を考える上で大いに有効な指標であろうが、秋声の文学的出発点といってもよいような時期に書かれた『青年文』への投書の内容を思えば、やはり秋声の題材選択は十分意図的であったのである。

小栗君は『寢白粉』の出た後で丁度賣れ出した盛り、私もそれ等の空氣に勵まされて大にやろうと云ふ氣を始めて心のどん底から起したのはその頃からです。

（「余が上京當時」明治四一年七月『早稲田文學』）

秋声の回想だが、ここで言われている「それ等の空氣」とは、「寢白粉」[13]が新平民故の近親相姦を描いているのだから、やはり題材の特異性、しかも社会の暗部を描く風潮と解してよいであろう。従って、社会問題としての新平民差別の告発は、松本氏の言を考慮した上で、「藪かうじ」第一の主題だったのである。

後、秋声は、「新世帶」や「黴」、やがて大正期の心境小説等によって、私小説作家と見られ、野口冨士男氏等は作品から秋声年譜を考証しているぐらい[14]だが、秋声の初期には、その目は多分に外に向けられていたのである。

岩永胖氏が「『無著庵日記』『秋声録』について」で明治二十三年初め頃と二十六年十月頃の秋声をその雑録に従いながら紹介している[15]。その中に、「秋声録」十月十二日「世はさまざまなれど一角の意見あらん程のもの誰か幸福に此の世を送らるべき」から始まって、秋声の自我と反俗の意識、やがて大義名分論への嗜好の顕著な表現がある。岩永氏の要約によると、「『大義名分論』と近代的な『自我』意識の野合が、その生涯を通じてこの自然主義作家の血脈として貫かれている」ということになる。実際、初期作品の中には、そのような観点に立って一層明確に理解される要素を持つものが多くある。

君子素より世にもとむるところなしといへども、鬱積するもの往々發して厭世となる。厭世主義はおもしろからぬに相違なし。しかも時流の汚濁其の罪にあらざるか、厭世主義はおもしろからぬまでも、厭世家に對つて一掬の涙を揮はざるものは是必ず無情惨酷の人矣

（「秋聲録」）

この「厭世家への同情的傾斜」は、消極的な現世放棄的性向の

現われであるとともに、後の私小説への移行にみられる現実否定の素地となるものであろうが、いずれにしても、秋声の社会的関心と自我意識は表裏一体であり、その振幅の間で作家活動がなされていったのである。

次に「三つ巴」（明治三十年六月一日から七月四日三十回『國民新聞』）を取り上げる。

今は没落し地方に隠棲しているかつての政治家多田熙の一人娘お敬を中心にして、三人の若者をからませその恋争いを描いている。多田の妻は既に亡く、その妹高子がお敬の将来を心配し、教育を受けさせるべく手もとにひきとる。それを銀行家富井惣兵衛の総領息子惣太郎に見そめられ、結婚を申し込まれる。しかしお敬は、見知らぬ相手に対する用心からか、地方に居る父や家名が大事とことわり続ける。高子の夫で、多田とは政敵であった天野孝之は、富井からの債務もあるため、執拗に高子を説得する。最後には、惣太郎はひき下がり、高子は許嫁であった天野の息子頼三と父のもとを訪れる。ちなみに、もう一人の若者は、多田家の近くで牧畜業を営む家の一人息子、俊造である。彼は、家が豊かでなく、母も彼を手放すのを嫌ったために学業を諦め、家業を継いでいる。お敬が上京した後は多田老人を慰める一方、お敬への思慕を強めていたが、男と帰って来たのを見て二度と姿を現わさなくなる。

通俗的であるとはいえ、お敬の心理が明確でなかったり、題名に反して、惣太郎以外の、頼三にしろ俊造にしろ、お敬への働きかけの場面がないこともあって、作品の主題があいまいである。寧ろ、お敬が、天野の「政治上の利益の犠牲」になるべくいかに苦しめられたかという辺りが、この作品の主要な事件として扱われているのである。それは、導入部分で、多田熙の政界での隆盛から隠棲に至る過程を長々と述べていることとあわせて、秋声の、政治の醜悪な面への関心を示しているといえる。

続いて「風前虹」（明治三十一年二月八日から三十日二十一回『讀賣新聞』）。

ここでは、主人公冬樹昶が、政治に志を抱く青年として登場している。

彼は今歳二十九歳にして、蚤く政界に名を知られしハ、其の華々しき運動と理財學とに由れしなり。黨内にてハ毎に豫算の討査を托せられて、政務調査員の列に加はりしが、久しく蟠れる軋轢の其絶頂に達せし時、五六の同志と分裂説を唱へしかバ、未だ計畫も熟せざりしに、禍を未前に絶たんとて彼ハ先黨籍を除かれけれバ、一方に少からぬ債務を負ふさへあるに、經驗に乏しき少壯政治家の、黨を離れてハ幾と立脚の地を失へるに比しくて、輝きに輝さんとせし運命の光も今に消々になりぬ　（三の三）

これによって題名の意味するものがほぼ予想されようが、そのように党を追われた少壮政治家の悲運を描くのが、この作品の狙いであったろうと思われる。ところが、内容が進展するにつれてそれ以外の要素が多く目についてくる。それは、紅葉山人補と明記された作品であり、榎本隆司氏が、「紅葉の補筆を得て失敗作に終わったといえばいい過ぎになろう」としながら、「風前虹」の尻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

切れ的な結末を秋声本来のものといい切れないことを、他の諸作などとあわせて論じていることからもうなずける。[16]

具体的に見ていくと、冬樹に関連する主要な人物に、故郷に帰って選挙に立とうとする冬樹の、敵政党と手をつないでいる疑いを明らかにするために彼を訪れる、かつての一番古い親友、そして政治仲間であった日置がいる。彼は同じ地区から立候補するために票を獲得しなければならず、政党に従うが、そのための人身攻撃などは好まない温良な人物として描かれている。

そしてもう一人、冬樹が身を寄せている寺の娘に尋子がおり、彼女は、与えられた情況には満足しない、つねに積極的に物事に興味関心を抱く女性として設定されている。

以上の三人を中心にして、雪の激しい地方の十二月の初めから新年にかけて、選挙運動の盛んになりつつある様子を背景に展開させている。

ちなみに、冬樹の性格は、敵政党の人間の言葉としてであるが、「他ハもう意氣地の無い、主義特操の無い、所謂る意志の薄弱な人間」としている。これなど、後に書かれる「惰けもの」に登場する猨山のさきがけと見ることも出来る。

結末は、妻に見捨てられ、尋子の関心も惹かなくなり、冬樹は行方知れずとなっている。それによってこの作品は、尋子との恋愛にも比重をかけ、恋と野望を軸にして構成しようとしたのかとも考えられるが、はっきりしない。いずれにしても、秋声が題材的に政界の権力争いで乱れた状況、そしてその周辺への関心を持っていたことは確かである。

ひき続き政治家を扱ったものに「惰けもの」(明治三十二年十二月『新小説』)がある。秋声自身、この作について、「ルウヂンのような型の人間の淺薄な解釋」[17]と述べている通り、保守的でありながら流されるままに生きていく人間が描かれている。

主人公猨山は、政党の仲間である遊座修三の頼みにより、党の資金を得るため、気心の通じていた党首の令嬢麻佐子をあきらめ、豪農の娘と結婚する。しかしそれは遊座が麻佐子を得るための策略であった。猨山は、やがて豪農の娘とも続かず、地方の小官吏の生活に甘んじる。

一方、「ルージン」[18]は、二葉亭により「うき草」と題して日本に紹介されているが、その主題は、「どうも君は可異な人だよ!――如何な考で事を起しても、屹度終局は自分一個の利益を犠牲に供して、如何なに地味が好くつても、厭な處には根を張らない」という旧友レジネフの言葉に、「僕はどうも浮草の性質なんだな。一所にいつまでも落着いてゐられないのだ」と答えるルージンのような人物造型にあったろう。

ここで「惰けもの」にもどると、確かにその結末で猨山を、「今でも屹々やつてゐる」と形容しており、ルージンのうき草的性格に似ていないこともない。しかしながら、「ルージン」と異なり、「惰けもの」の場合には、猨山や遊座を始め、政治に関係する人々によって構成しており、党の資金援助などを持ち出すことによって、今までの同傾向の作品に類した内容をもっているのだから、榎本氏のいうように、「この時期の秋声は、あくまで人物の内面に立ち入り、そこにひとつのタイプを描出しようと心にしていた」

点に留意したとしても、同時に、題材としての政治への関心の強さは大いに注意されるべきである。

さて、これまでは政治家中心だったが、次は、社会の上層としての華族に焦点をあてている。

茗荷谷に住む一小華族に妾腹の子あり。嫡兄は戇愚、夫人は驕慢。長姉昔美術家と相戀して走り、片身の少女を遺して逝く。長兄畫を學んで成らず、利根河畔面影をカンバスに留來りし美人は、端なく結婚後の家庭に波瀾を提起して、長に累を身に及し、少女が棄てゝ教へられざりし性情は、亦盲的戀愛を夢みて纏絡容易に拂ふ可らず。此間他の狡兒、辨佞人の家を蹂躙して、夫は爲に狂して死し、婦は爲に不貞の人となる。周邊の事相爾く紛糾して、彼は遂に運命に服從せんとす。

これが「雲のゆくへ」(明治三十三年八月二十八日から十一月三十日九十二回『讀賣新聞』)の梗概だが、[19] 妾腹の子、比企均を中心に、子爵家の没落していく様子を、右の文章にもあるように、長兄、そして夫人の欠点を主要因に描いている。均は、子爵家と距離をおかれているために、いろいろな視点をとり、零落の過程を多面的に描き得ている。

ところでこの作品の結末では、長兄寛、特に夫人牧子に取り入った楢村が、鉱山への投資に金をつぎ込ませ、事業がうまくいかなくなったとして子爵家没落の主要因を自らつくりながら、平然とそれを眺めている。

楢村は何爲たらう。

其年の暮帝都の中心の好位地を占めて、景気よく營業を始めた、或保險會社の重役にも其名が載つてゐて、今興らうとしてゐる興業銀行の委員中に、豪して羽振を利かす楢村も、或は彼が後身ではあるまいか。

悪どいことをやる人間が最終的には出世していくことを暗示している。かつての権力者であった華族は、無能によって没び、一方、現在の上流社会の人間にはその過去にどんな悪事があるかも知れぬという、うがった見方がなされている。

(略)本篇を以て完成の作として迎ふるに能はざる也。何となれば本篇は唯結構の上に面白味を求めて、其の内面的生命を描すことを後にしたればなり。

(「『夢のゆくへ』と『夢の夢』――秋聲と春葉」明治三十四年十一月『早稲田學報』)

同時代評は、以下細かく人物造型の不備を追求し、文学作品としては決して秀れているものではないことを論じている。

しかし、秋声は後年、「『雲のゆくへ』が先づ私の處女作といつていゝだらうかと思つてゐる」[20]と回想しているように、「藪かうじ」をさし置いてこの作品を取り上げるのは、『光を追うて』などからも知れるように、「雲のゆくへ」の評判が連載中からよくて、出版されると、西の旅に行けるだけの収入を得ているわけで、それはつまり、文壇的には認められなくても、世間に受け入れられたことを意味している。それは又、当時、秋声が紅葉の推薦で読売新聞社に属しており、社会背景として、日清戦後の著しい階層分化、争議の多発などの動きを知りやすい立場にあったこと等も関連して、「雲のゆくへ」を展開させていったとも考えられる。

その後も似たような傾向の作品が書き続けられているので、簡単に触れる。

「ゆく雲」（明治三十六年六月一日から十五日まで十五回『二六新報』）。「事物を視る目が、余りに淺膚に過ぎる所爲か、或は忍耐力が無い所爲か、行りかけた仕事が、何時も中途で可厭になつて了ふ」ルージン的な性格を主人公に与へ、「惰けもの」の応用。

「撫子の色」（明治三十六年七月『女學世界』）。新平民故に、思うような結婚の出来ない娘の悲劇。

「少壯政治家」（明治三十七年七月『青年界』）。家が貧しく、苦学して政界に進出した青年の人物が秀れているために、思わぬ援助を受け、増々発展するという教訓めいた立身出世物語。

「少華族」（明治三十七年十二月九日から三十八年四月十五日百二回『萬朝報』）。塩田良平の見解を借りるなら、「『雲のゆくへ』などの跡をひく硯友社育ちを思はせる長篇作品、つまり構成を中心とした所謂通俗小説」[21]の系列の典型として分類できる。出世欲の盛んな小田垣を主人公に、子爵令嬢との恋愛、破綻のいきさつを描く。

なお、これら秋声の上流階級その他に関する知識は、『思ひ出るまゝ』[22]にもあるが、明治三十一年から接触している長田秋濤からの得るものも大きかったのではないかと考えられる。松本徹氏の教示によるが、中村光夫の『贋の偶像』[23]では、新井教授と大学院生とのやりとり、そしてそれぞれのノートを紹介していき、中年の恋などを交へ、読み物風であるが、秋濤の伝記をまとめている。それによると、「自然主義の主要な側面をなした歴史的権威（すなはち迷信）への反抗、道徳の絶対性の否認は、彼の性格の基本をなしてゐ」ながら、「尻抜けの浪費家」「贅沢好きの怠け者」で、かなり無軌道な生活を送っている。その他、政治との関係も深かったようだが、秋声のそのころの思い出を作品にした「別室」（明治四十五年十二月『中央公論』）に、次の記述がある。

K―は、そんな人達（注、Kのもとに寄宿している若い男や「いつも議會の議事筆記に傭はれる速記者」などを指す）と一緒に、寢轉んで無駄話に晷を移した。其連中から、時時そこへ集まつて來る政治家や文學者の噂、山内などの連中の遊に行く、赤坂や新橋あたりの料理屋やそこへ現はれる藝者の話を聞かされたりした。

秋声の作品への題材提供の機会と考えてよいのではなかろうか。やがて、「幾年かを過ぎ」たある年の正月に、気が向いて秋声が、秋濤であるところの山内を訪ねてみると、大分生活が豊かになった彼は、妻妾同居の生活をしていた。

K―は、山内とも、そこに集まつてゐる人達とも、大分隔りのあることを感じた。そして階下で結鰯などで屠蘇を飲むと、間もなくそこを出た。

これで作品は終わっていて、いわば別世界を少しばかり見知った体験が記されているが、その結末は、例え、「作に志してゐたK―は、この夫人などから、出來るだけ女性に對する暗示を得ようと考へてゐた」として、秋声が山内夫人に惹かれるものがあったにしろ、山内、つまり秋濤達の住む世界に好意的でなかったことが窺える。そう判断させる秋声の書き方には、倫理的な要素さえも感じられるのである。

さて、日露戦争も終結する頃になると、短文ではあるが、秋声が自分の文学態度、方法等についての反省、或いは確認をしているものがある。

まず、「小華族　自序」[24]がある。「有體に言へば、余は未だ當今の所謂る新聞小説體の作品に於て、眞摯なる人生の描寫説明を試み得べしとは信ずる能はず。」に始まり、「余は目下のところ、寧ろ短篇小説の直截にして、一路直に胸臆を述べ得るの捷徑なるに左袒するものなり」として、硯友社的戯作を脱し、「人生の何物」をか捉えようとする秋声の意気込みがみられるのである。

これを受けて、「『少華族』を評するを機とし、作者が其作物に對する意見を聞く」とことわり書きのついた「秋聲子の創作談」[25]がある。

（略）まあ此頃切に感じたことは、自分の作物が是迄大抵一種の空想や、一つの概念を擱まへて其れに肉を着けてゐたやうな感がするのが何うも面白くない。輕佻でいけない。矢張極々自然に接近して、動かない眞實のところを飾なく書かなければいけないと云ふ事を感じるのです。

使用されている言葉の内容が明確とは言い切れないまでも、とにかく「自然」「真実」への関心の大であることが認められよう。もっとも、秋声自身、自己の思想については、「昨是今非」と、不安定だが、いずれにしても、概念に肉を付けただけのような作品には疑問を呈しているのである。そして、この場合の概念に当るものの一つには、本稿で扱っている「斷片」の流れを汲むものも当然含まれていると考えられる。つまり、今まで見てきた作品中、主要な役割を果たしてきた題材、或いは状況設定としての政治家、華族、新平民等の扱い方に疑問を示しているのである。

短篇集『はなたば』[26]の「はしがき」にも同主旨の文があるが、やがて、秋声は、「新世帶」や「足迹」に代表されるような自然主義的傾向を顕著にしていく。

その場合、社会性を重視した作品系列を見ていくと、その転換点として、「老骨」（明治三十九年七月『新小説』）が重要な意味を持ってくるのではないかと考えられる。

「老骨」では、題名からすると、旗本の三男に生まれ一時は警察署長までしながら、人と妥協出来ない性格故に、今は零落してしまっている清水松蔵を主人公にしている。彼の子供に、「間接には潔の學業を助けるために、此二三年奉公に出てゐた」二十三歳になるお芳という娘と、学業はさほどではないが、音楽好きのおとなしい二十一歳になる潔という息子がいる。

昨年の秋、隣家の波多男爵の長男熊太と遊んでいた潔が、戯れの銃で撃たれて以来入院していたが、六月にとうとう亡くなってしまう。

波多男爵家では、事故にもかかわらず病院に入れてやるだけ有難く思えといった態度であったが、やはりやましさはあるらしく、申し分けの意味も兼ねて、お芳を女中として奉公させる。

ところが、お芳は男爵によって身籠らされてしまい、外聞をはばかった夫人の手によって、かつて松蔵の後妻、お芳にとって継母であったお須賀という女と駆落をした波多家の雇い人龍吉と一緒にさせられてしまう。

間もなく、持たされた化粧品店の商売もうまくいかずに、お腹の大きくなりつつあったお芳は、別れる決心をして、怒りのために絶縁されていた父のもとを訪れる。

娘の窮状を知った松蔵は、「一人ならず、二人まで……」と怒るが、体も利かず、どうにもならなかった。

其翌朝雪がちら〳〵降つてゐたが、物置に首を縊つた老爺の死骸が、凍つて堅く梁から垂下つてゐた。

男爵家では、こんな始末まで爲なければならなかつた。

お芳は龍吉と、其から一年ばかり不愉快な日を送つてゐたが、旋て別れて了つた。

産れた子は、男爵家に引取つて育てゝ居るが、お芳は再び何處かに召使の身となつてゐる。

松蔵にとっては、波多家への批判を、自分の死体を見せつけてやることによってなすしか方法がなかった。

一方の男爵家にとってみれば、松蔵のぶらさがった死体は、冬の日の光景の一事に過ぎず、それによってもたらされた変化は見られない。強者は最後まで優位な立場を失っていないのである。

秋声は、この作品で、上層社会と下層に属する人々との交渉を描き、しかも上層の人間によって下の人間の生活が破滅に追いやられる過程をたどることによって、対比的な構成から、上層社会の偽善性を明らかにしようとしていたのだと考えられる。

今までの作品では、たとえ華族を題材にしても、それらは、内部が中心であり、外部の人間は、せいぜい波瀾を引き起す役割しか与えられていなかった。

それが、この作品では、「老骨」が本文中でそのまま松蔵の形容に使われていることからも解る通り、強者に虐げられる人間の悲劇を主題としているのである。

ここで振り返られるのは、「斷片」第十一での秋声の考え方である。

現世は豈に其實封建制度にあらずや。階級制度にあらずや。四民平等と稱するは僥倖の恩恵に浴する横着ものゝ言にあらずんば、薄志にして世潮に抗すること能はざる怠惰漢の言なるべし。怨嗟せるものを厭世なりと嘲けるは、怨嗟すべきことに出會はざる社會の寵兒が愛を專占せんとするの口實なるべし。今の世一人たりとも安じて心を安易の地に置く人あらば椿事なるべし。彼らは自分を研究せずして社會を見んとするなり。社會に適合すべく自ら性を枉げて改造するなり（略）

人權を稱道すること今の世の如く喧くして、而して人權を枉屈する主僕的階級の社會の到處に發見さるゝは果して何故ぞや。

ここでは、上層社会の欺瞞、横暴だけではなく、それらを黙認し、疑問を抱かない人々の自覚の乏しさを激しく糾弾している。

「老骨」の内容は、これに殆んどそのまま呼応している。男爵家の悪事はもちろん弾劾すべきであるが、彼ら一族を最後まで安穏に描いている秋声は、潔の死が事故であり仕方ないにしても、波多家の乱れた様を承知していながらお芳を手放す松蔵、そして、世間的な欲に動かされ、身を飾り、やがては、継母とのいきさつを知っていながらも龍吉と世帯を持たされてしまうお芳の心情の

変化まで書いている。したがって、「老骨」の主題は、強者の悪事を前提に、それを容認してしまう下層者の意気地無さ、松蔵の「老骨」の気弱さに帰着する。結末で松蔵が首をくくるのは、秋声からすれば、このような人間の運命は、悲惨な死に様しか無いのだという、松蔵やお芳に対する批判でもあったのである。

この時期の秋声の思想性を明らかにする資料として、「眞の社會小説」（明治三十九年十一月『文章世界』）という談話筆記がある。

先ちよツと今思ひついた處では、我々作家の缺點とも云ふべきものは、頭腦のない事が根本的の缺陷でもありませうが、押なべて現社會、我々の生活と云ふ點について、一般に注意力が足りないのではないかと思ふのです。注意力の足りないのは、所詮感覺が鈍いので、感覺が鈍いと云ふのは、或は理想がない、頭腦がないと云ふ事に歸着するかも知れませんが、詩人は必ずしも哲學宗教家ではないのですから、さう明瞭に事理を解するだけの能力がなくとも先可い譯なので、唯我々が現在活きてゐる我々の社會を今少し眞率な態度で見なければなるまいと思ふのです。例へば或小説が非常に高遠な人生觀を書現はさうとする、大陸の思想や作物に感化れて、其を直に書かうとする、其場合にも、もしも作家が日本の現社會卽ち自分の生活してゐる社會を知らずに筆を執つたならば、其作は無意義な作と云ふより外なからうと僕は思ふのです。左樣云ふ作は丸で痛痒を感ぜぬ他人の事を書いてゐるやうなもので徒に高遠にのみ走せて、反つて自家頭上の大切な問題を閑却してゐるのだらうと思ふのです。（略）一言で言へば社會小説の方が興味があると云ふに在るのです。

自己弁護を交えながらも、対社会的関心は明らかであり、続く文で「我々は正當に統治されてゐるや否やと云ふことも考へて見なければならぬ」と述べていたりして巨視的に社会を捉えようとしている。

又、ここで、日本の作家による外国の思想等の理解について疑いを示しているが、見方を変えれば、むしろ生活に追われ続けた秋声にとって、自分と上流社会との関係にもなるわけであり、とりもなおさず、自分が今まで書いてきた、題材本位の華族、政治家、あるいは新平民を扱ってきた作品への物足りない反省へとつながっている。その移行を「老骨」に見出せる。

秋声は、『秋聲集』によって高い評価を得、相馬御風などから、「近頃流行のシンミリとかシミ〴〵とか云ふ人生の味は秋聲氏の作の特色の殆んど凡てであるとも云つて好い位だ」[27]と述べられるが、その中に、「絶望」や「二老婆」などを典型として、下層社会の救いようのない生き方が描き出されている。その背景には、今までの作品傾向の転化したものとして、矢張り、社会批判が根強く保持されているのである。

没落士族の異腹の末端部に生まれた劣等意識、虚弱な體質からきた劣等意識、中途退學という劣等意識など、秋聲は生をうけてから長いあいだ、多くの劣等意識の混合した觀念に惱まされていた。

和田芳恵氏が指摘するこれらの劣等意識を基本的性格としながら、「生きる上に光が必要なことは當然」[29]であるから、自己否定だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com